

「ゴー・ストップ」初版発禁版書き起こし・解題凡例

伊藤 純

「ゴー・ストップ」一九五五年戦後版に付された

作者自身の解説（抜粋）

貴司 山治

伊藤 純・編注

「ゴー・ストップ」初版発禁版書き起こし・解題凡例

伊藤 純

貴司山治の小説「ゴー・ストップ」には、以下のような版がある。

- ①初出：一九二八年八月～二九年四月の間「生まれ・進め」という題名で東京毎夕新聞に連載された。（後半のみ入手、前半未発見）
- ②初版発禁版：一九三〇年四月新聞掲載稿に大幅に手を加え中央公論社から単行本として発行。労働大衆版などと書いてある。（四日後に発売禁止になった）
- ③戦前改訂版：発禁の二〇日後に検閲に対応する改訂を加えて発行された。但し貴司の戦後の記載（私の文学史）によると、一部は外箱に改訂版と印刷しただけで、中身は改訂前の版をひそかにいれて売ってしまった、とある。
- ④春陽堂文庫版：一九三二年、貴司が拘禁中に徳永直に依嘱し、作家同盟の批判に対応すべく改訂し、春陽堂から文庫として発行された。
- ⑤戦後改訂版（三一書房刊）：戦後一九五五年、春陽堂文庫版に極力近似させるべく貴司自身が記憶によつて（春陽堂版は貴司の手元になかった）改訂を加え「最終版」とした「戦後改訂版」。

書き起こしは、貴司が自ら「最終版」とした戦後改訂版に基づくのが本来とも思えるが、この改訂は、執筆当時の「芸術大衆化論争」の中での作家同盟や蔵原惟人の批判に屈服し、物語性を大幅に減殺し、しかも検閲を配慮した微温的な言い回しも大部分温存されている、という性質のものである。

なぜそのような版を戦後、検閲や規制が無くなった時代になおかつ「最終版」としたかは一つの謎である。おそらくこの「最終版」を刊行した一九五五年という時期に貴司は「唯一軍部に屈服しな

つた非転向の民主勢力」として大きな影響力を発揮していた日本共産党、その非転向の文化指導者蔵原惟人に帰依する心境に立ち至っており、かつての作家同盟幹部らの批判を追認する気持ちになつていたことが大きな要因と想像される。

それらの経緯はあるにせよ、読みくらべてみれば、やはり初版が明らかに生き生きとした、あの時代に生きている作品と感ぜられる。理想をいえば、日々の読者の反応を受けながら執筆していった新聞連載版がもつとも復刻するにふさわしいものではないかと思われるが、残念ながら、この新聞掲載版の全容はいまだ見出すことができない。従つて、この書き起こしは、中央公論初版本の復刻を目指して作成した。

ただ、以下の点に配慮して若干の改変注記を行った。

- ①伏せ字起こしは、戦後三一書房版のために初版本に作者が赤字で書き込んだ書き込み可依拠し太字で表記した。但し、第十三章末尾の、初版で大量の伏せ字がおかれている警察による労働者拷問の場面は、戦後版では全体として削除されているため伏せ字の書き起こしが行われておらず、復元できなかったため×印のままとなっている。なお、起こした伏せ字は太字で表示した。
- ②仮名遣いは原則として現代仮名遣いになおした。但し、促音の「っ」を小文字にしないなど、やや違和感のある書き癖があるがこれはそのままとした。
- ③初版は総ルビだが、この書き起こしでは一部のみとした。
- ④現在ではその含意がわからなくなっている字句や背景については、ある程度の説明や注記を加えた。

「ゴー・ストップ」一九五五年戦後版に付された作者自身の解説（抜粋）

貴 司 山 治 伊藤純・編注

*……は中略箇所を示す *小見出し、注は伊藤純による

●「ゴー・ストップ」発禁と徳永改訂版発刊の経緯

この小説の初稿は、一九二八年八月から、二九年四月まで、東京毎夕新聞に連載された。

……この小説は、東京毎夕新聞に連載中、当時の急進的インテリゲンチヤや労働者階級の間で、次第に評判になり、左翼唯一の出版所であつた戦旗社から、小林多喜二の「蟹工船」や徳永直の「太陽のない街」と同様に、この、「ゴー・ストップ」を出版したいといつてすすめて来た。交渉にきた社員猪野省三に、私はこの作品が「蟹工船」や「太陽のない街」のように芸術を意図して書かれた小説ではなく、それとは別の「労働大衆の娯楽読み物」として書かれたものであることを説明して、それに対する戦旗社の考え方を糺したが、明瞭ではなかつたので出版を承諾するには至らなかつた。

その直後に、そのころ初めて単行本出版部を創設して、ルマルクの「西部戦線異状なし」（秦豊吉訳）を十何万部売つた中央公論社がそれに次ぐベストセラーを狙つて「ゴー・ストップ」を出版したいと言つてきた。私はその出版部長の牧野武夫に「新聞にのつた原稿は全部改作する」「労働大衆の娯楽読み物ということを本に明示する」という条件で出版を諾した。

……こうして一九三〇年三月下旬に出された中央公論社版の「ゴー・ストップ」は初版二万部印刷

して、四日目に内務省の発売禁止処分にあい、全国的に差押さえられたがそれでも一万一、二千部はすでに売れていた。旬日中に改訂版を一万部発行し、こえて二年後の一九三二年に、春陽堂から文庫本として一万部発行したが、この時は私が治安維持法違反の名目で豊玉刑務所に入れられていたので、徳永直にたのんで、それまでに作家同盟によつて批判された部分に改訂を加えてもらった。

●執筆当時の時代背景

私がこういう、労働大衆の読みものを書く仕事を、文学者の一つの任務として思い立つたのは、わが国の労働階級の政治運動がようやく国際的な軌道に乗った途端、支配階級の弾圧を受けて、一九二八年三月十五日、二九年四月十六日と、何千人もの被検挙者を出し、階級闘争史上の未曾有の血腥い激戦を展開したその渦中においてであつた。

私などは、その時まで日本に共産党のあることを知らなかつた。共産党はまつたく秘密結社として組織されて一般大衆には隠され、その代行政党として労働党が合法面におし立てられていた。そのうち、共産党の幹部は……コミンテルンから批判され、運動の仕方としては犠牲をいとわず、共産党そのものを公然化するコースへ転換し労働党は発展的に解消すべきだ、という新段階に移つた。それが一九二七年暮れから、二八年春にかけての情勢であつた。

……また、秘密結社の共産党、合法政党の労働党の基盤となつている左翼労働組合は、日本労働組合全国評議会——略称評議会と称せられ、右翼の総同盟その他と対立しながら、最も激しくストライキ闘争を全国の各工場にまきおこしていた。「ゴー・ストップ」の主たる内容となつている東京江東地区の一ガラス工場のストライキは、この評議会の活動を描いたものである。……

●題材、モデル、鳴門塩田争議との関わり

当時の作者の、個人的事情を述べてみると、……第一次世界大戦後に郷里の鳴門で、評議会指導の大ストライキたる塩田争議をつぶさに見聞していた。大阪に出て、新聞記者生活中、郷里以来の縁故で評議会本部に出入りし、委員長の野田律太と面識をかわし、国領伍一郎、杉浦啓一とも知己となり、大学を出て評議会本部書記をしていた、長尾他喜雄とは友人となつた。

一九二六年、評議会が本部を東京に移した時、私は記者をやめて作家となり、上京して大森山王に住んでいたので、野田、国領が常に私の宅に来、運動資金の寄付等をした。「ゴー・ストップ」の内容は野田の協力によつて構成された。野田からの題材提供で書いた作品は、このころ無数にある。「ゴー・ストップ」に出てくるガラス工場は、野田の紹介で友人となつた柳瀬正夢と、無産者新聞にのせるため、江東方面を写真撮影にまわつた時に立ち入つて観察した、一ガラス工場をモデルにしたものだが、登場人物の山田委員長は野田律太であり、沢田は長尾他喜雄と、ほかに時計工の長江甚成をモデルとした。

【注】このあたりのエピソード、野田や柳瀬との交流の実際はホームページ「貴司山治資料館」
<http://www.kisyamaji.com> 内の「私の文学史・遺稿」にくわしく書かれている。

鳥羽のような型のテロリストは、大正時代の労働運動の内部にはいくらでもいた。しかし私が「ゴー・ストップ」に鳥羽を英雄のように書いたというゴウゴウたる当時の非難には、そういう理由では対抗できなかつた。

……鳥羽の行動は私の「塩田争議資料」中からの抜粋であつて、鳥羽が塩田争議の同志と巡りあう

などという話のついたりも、そのせいである。……

【注】多くの資料が残っている大正十五年（昭和二年）の鳴門塩田争議でも、暴力団の介入、それに対抗する自衛団の結成などで、暴力行為が頻発した。組合側の暴力実行者として警察に追われながら逃げおおせ迷宮入りになった事件もあり、関西から逃げてきた鳥羽の設定はそれらを反映しているようである。

●作家同盟からの批判と非難

作家同盟は、結成の翌三〇年、それ以前からひきつづいて「プロレタリア・リアリズムの発展」の問題と「プロレタリア文学の大衆化の問題」とに新たに当面した。特に「プロレタリア文学の大衆化」の再討議には、私と徳永直とが作家同盟中央委員会によばれて参加した。

私はその席上で「労働大衆のための娯楽読み物」を書くことが大切だという自分の単純な考えを理論的混乱のままでのべたために、それはそういう主張の形で、危険な謬まつた考えをプロレタリア文学運動に持ち込むものである、と「ゴー・ストップ」を例にとつて中央委員のほとんど全員から排げきされた。中野重治、鹿地亘、川口浩、壺井繁治、山田清三郎、立野信之、片岡鉄平などがそのメンバーであった。

……蔵原は、私の目の前で寸毫の仮藉なく「ゴース・トップ」を批判した。私はどうか自分の主張の誤謬の所在が分かつた気がしたが、それでもなお割り切れぬものを心にのこした。

……一方同じ趣旨を中央委員会では「芸術大衆化に関する決議」として雑誌「戦旗」に発表した。（鹿地が書いた。）

……「ゴー・ストップ」にみるような内容の卑俗化……事件の組み立てがリアリズムから外れ、偶然性が無批判にとり入れられ、個人的英雄主義が肯定的に描かれる書き方は、正しい意味の大衆化ではない、それは又革命的プロレタリアートのイデオロギーに反する——として、批判されたのである。

●残された文学大衆化の課題——一九五五年時点での貴司の見解

……私は作家として世界観も創作方法も至つて幼稚なために「ゴー・ストップ」のような通俗読み物を書く力が足りず、その中に多くの卑俗さ、偶然性、封建的英雄主義、挑発的エロチズム等々を持ち込んだのであつて、これを芸術として追及する方法をとつておれば、あるいは救われたはずである、ともいえるのである。（しかし）「芸術大衆化の決議」がこうした点に深く触れないで「形式の単純さと明朗さ」などを規定してみても、それは何も産み出さないと、また産み出さずに終わった。そしてこの決議によつて、最初私の提出した「労働大衆の娯楽読み物」を書く作家の任務は抹殺され、或いは忘れ去られたのである……。

私の疑念は決議のあとまでのこつた。そのために私は一九三四年になつて「文学評論」（ナウカ社）誌上で何回にもわたつて、蒸し返してこの「大衆化」問題をとりあげたのだったけれど、それらすべては時の圧力におし流されてしまつた。

……私の「ゴー・ストップ」などは、二十五年前に私が手さぐりで、貧弱な方法でやつと書いた一篇の「通俗読み物」であつたのだが、こういう仕事の座席は文学運動の上では与えられずにきてしまつたのである。……

しかし、唯一つ思い出すのはこの作品の批判がほぼ決定した、一九三二年、左翼劇団の合同公演で

この作品が市村座で上演されたことである。山本安英が英子を、笈川武夫が沢田を演じたが、私は脚色者藤田満雄（山本の夫・故）が、当時のこの作品の「危険な要素」にたいするゴオゴオたる非難の渦中で、あえて「ゴー・ストップ」をとりあげた理由を生かしたいと今でも考へる。

「この作品の批判された欠点は、脚色に際してけずりおとす。そうすればこの作品の持つている長所、ルンペンの一少年が階級性に目めざめて労働運動に入つてゆく経路や、ガラス工場に労働組合の産まれる集団生活の光景や、ストライキになつて評議会の指導が行われる順序などは、この作品全体の持つている強い大衆性を通じて、好ましい影響を観客に与えると思はれる」

この作品は初版から二年後の春陽堂版のときに、徳永直によつて改訂された。それは作家同盟の批判に従つて卑俗なエロチズムの部分、鳥羽の行動の部分をおしたのである。その徳永改訂版は、絶版後どこにもみつからないので、やむなく、こんどの公刊に際しては作者が新たに同様の改訂を加え、ほぼ徳永改訂版に近いものにした。

このような改訂は、あるいは文献性を失うかもしれないけれど、作者の意志は当時の蔵原惟人を主とする作家同盟の友人たちの批判をうけられて、一九三二年に徳永に依頼して改訂した版をのこしたというにあるのだから、それに代わるこんどの版を、最終版とする次第である。……

【注】右の作者の『宣言』にかかわらず、解題に書いたような理由でこの複製版は「中央公論初版」を底本とした。